

木のおもちゃに魅せられて18年

(その2)

木工塾「といこうぼう」 主宰 伊藤英二

木の玩具の見直しとつくり手の増加

見て・触れて・遊べる木のおもちゃ展.....

おもちゃの家には、土・日曜日や夏・冬休みになると、いろいろな人たちが訪れました。各地でのおもちゃ展や手づくりおもちゃ教室の回数が増えるとともに、木のおもちゃを作る人たちもずいぶん多くなりました。展示会で「とても気に入ったので、おもちゃをぜひ売ってほしい」と言われますが、そのたびに「これはひとつしかないで売れないけど、お父さんお母さんで作ってあげてはいかがですか」というと、「えっ、自分で作れるんですか」とびっくりした顔で私を見ます。おもちゃを「作る」なんて、とんでもないことを言う人だと思ってしまうでしょう。今では「作る」という言葉は死語に近く、物は「買う」ものと思いでいる親(子どもも)がほとんどです。子どもの成長を支えるおもちゃは、何よりも「この子のために作ってやろう」という親の温かいほのぼのとした愛情が原点.....と、工房に通って来た若いお父さんお母さんもいます。

また、老化防止のために80才過ぎの方が木工講座を受講され、出来あがった作品を孫にプレゼントするおじいちゃん、障害を持った子どもとお母さん、先生方のおもちゃ教室と、この10数年の間に、木の持つすばらしさと手づくりの楽しさが静かな広がりを見せて

きました。さらに1989年、交通博物館や動物園、遊園地などが織りなすメルヘンと、木の温もりを絵本にしたような『木と子どもの詩・手づくり木のおもちゃ』(北海道新聞社刊)の発刊、各地の展示会での子どもたちやお母さんたちとのすばらしい出会いの中で「おもちゃに囲まれたお話やコンサート」を...と夢が広がり、数百点の手づくり木のおもちゃと、森の妖精“木夢”たちがくりひろげるメルヘンウッドステージ「木夢の島」が1988年に誕生しました。

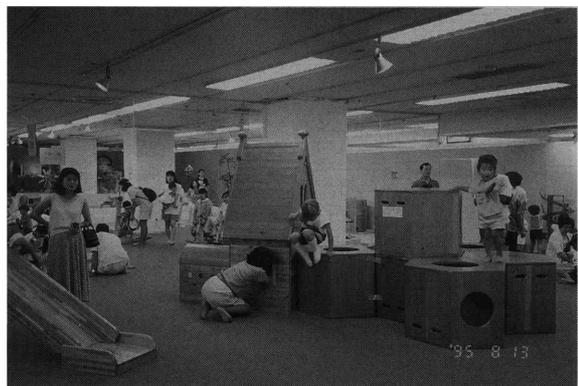
----伊藤英二の手づくり木のおもちゃ。メルヘンウツ



手づくり木のおもちゃ教室
1994年8月 小樽市青少年科学館



大型玩具「組む組むランド」



子どもたちに人気のある「木の遊園地」ハッチハウス
1995年8月 金沢

ドワールド「木夢の島」(1983年,NHK出版)の発刊。
----材料はすべて北国の厳しい大自然の中で数百年も
生きぬいてきた,セン・カツラ・ナラ・イチイ・クル
ミ等の端材に新たな生命がふきこまれたものです。

展示会の方も,公民館とか科学館主催の形式から,
今では,実行委員会主催のものが多くなりました。例
えば,釧路管内の標茶町では,20人ほどのお母さん方
が中心になり,子どもたちに夢を...と,数10万円の予
算を自力でつくり,ついに「夢ひろば,Toy ひろば」
を成功させました。さらに,弟子屈,釧路,根室,浦
河,剣淵,名寄等市町村の町おこしと連動した実行委
員会形式の展示会が続いています。また,これらの展
示会をきっかけに,1993年からは,NHKサービスセ
ンター主催によるメルヘンウッドワールド,「木夢の
島」の展示会を,東京,大分,横浜,金沢で,また別
の主催で,箱根彫刻の森美術館,日立科学館.....と
全国展開させていただいております。「木夢の島」の
公演も,地元の畠辺薬・北見をはじめ,東京,札幌,
帯広,芽室,剣淵,名寄,旭川,下川,釧路,興部と
広く全国各地で地元の文化サークルの方々を軸に,そ
れぞれの地域に応じたステージをくりひろげています。



メルヘンウッドステージ「木夢の島」
1994年11月 弟子屈町摩周文化センター

それでは,展示会によせられたメッセージを紹介しま
しょう。

<メッセージ >

小学校1年生の女の子,多少障害を持っているので
すが,入館すると同時にニコニコ顔,気に入ったおも
ちゃの前からはなかなか動こうとはしません。久しぶ
りにそんな姿をみて,親としてただ感動するばかりで
した。本当に木のぬくもりって,すてきで,なんと感
触がよいのでしょうか。

1993年10月 鎌倉市の母親

<メッセージ >

作品展を見て,ただただ感動.....忘れていた大切な
ものを,喜こんで遊ぶ子どもたちの笑顔と一緒に思い
出させてくれました。やっぱり木は素晴らしい。木の
遊園地で遊ぶ子どもたちの瞳はキラキラ輝いて,とて
も優しい。それを見守る大人達もおだやかな顔にし
てくれる。木って不思議な魅力がありますね。

1994年7月 大分市の主婦

大型木製遊具の開発・製作

幼児が押して遊ぶ「手押しカー」や「積み木」・
「パズル」,やや大きなものとして乗って遊ぶ,「キ
ャスターカー」や「木馬」など,200~300点ほどの作品
を小型トラックやボンゴ車で運んでの規模の小さな展
示会も,回を重ねるうちに,シーソーやすべり台とい
う作品も加わり,現在では4トンから11トンの箱車で
輸送するほど作品も大型化してきました。育ちざかり
の4~5才になると,遊び方も全身を使ってのダイナ
ミックなものになってきます。ダイナミックに,しか
も子どもの発想によっていろいろな遊び方のできる可
動式(組み立て式)の室内遊具の試作に取り組みまし



メルヘンウッドワールド「木夢の島」
1995年1月 横浜

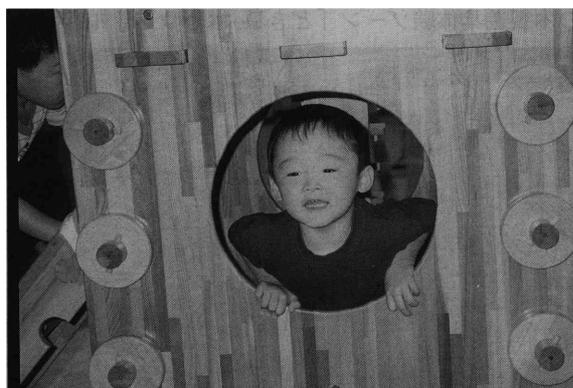
た。製作の条件としては 丈夫であること 安全性が高いこと (PL法) 構造的に単純.....の三点を基本に、組み立てが容易で可動式、登ったり、もぐったり、すべったり...の循環機能がある遊具、ごっこ遊びができる遊具をと、ジャンボすべり台、ハッチハウス、組む組むランド、木の砂場、ごっこハウス等の試作をしました。

これ等の中から2~3点を紹介したいと思います。

ジャンボすべり台

のぼる、すべる、かけおきる、もぐるといった挑戦的な遊び行為機能をもった遊具がこのすべり台です。中央の台が子どもの家、横に三角屋根の煙突が取り付けられています。下の玉受けから木球をにぎってろく木のはしごを登り、三角屋根の煙突に木球を入れると、コロコロと楽しい音の出るオルゴール。すべり台の下にはローラーがついており、スロープを取りはずしてみんなで引っぱるとジャンボトレーラに早変わり、2階だてのお家とオルゴール、.....今までの作品をいくつか組み合わせて出来あがった多目的遊具です。

もちろん、分解可能です。



いくつかの遊びの機能をもつジャンボすべり台
*材料はニレ・ナラの集成材を用いています。

ごっこハウス

「さあ、ごはんですよ」

「手を洗いましたか。ごはんの前には手を洗いましょう。」ごっこハウスの中の子どもたちはみんな友だち。東京の子がお父さん、横浜の子はお母さん。子どもは水戸っ子.....と自分の家庭と重ねて、父親役、母親役、子ども役...と思いのまま変身しながら、ごっこ遊びの世界は広がります。保育所を訪れた折、ダンボールで壁をつくり、家に見たてて、ごっこ遊びをしていた子どもたちを見て、木を使った本物の部屋を作り、子どもサイズのガス台や食器棚、テーブルやイス、それに手づくりのままごとセットを組み合わせて出来あがったのが、この「ごっこハウス」で、今では私の展示会では、欠かせない、子どもたちの夢のお部屋です。



幅300mm・高さ900mmのマツの板材をはめ込んだ

パネル12枚で組み立てたゴッコハウス

木の砂場

長さ80×5cm角の湾曲したブロックを積み上げた直径2mのサークルの中に、イチイやナラ、ニレの埋れ木で作られた直径30~40mmほどの木球を2万個以上入れた木の砂場、1個1個角をヤスリで削って丸くなった木球だけに、ひとつひとつが不揃いなところが個性があっておもしろい。プラスチックのボールプールで遊ぶ子どもたちの様子を見て思いついたのが、この木の砂場である。私の展示会で幼児からお年寄まで最も人気のある遊具のひとつで、どこの会場でも子どもたちは大喜び、今では九州から根室まで日本中の子どもたちの手のぬくもりで木球はピカピカになるほど、木の感触を全身で味わっています。

<メッセージから>

木の砂場が一番気に入っています。子どもたちがあんなに楽しそうに遊んでいるので、座って見ていたら「ただで入って遊んでいいんですか」と1年生くらい

の男の子に聞かれてしまいました。なんでもお金を払って遊ぶ習慣のある都会っ子の悲しさです。

「コロコロ」ところがって落ちてくる木の玉をにぎりながら、不ぞろいの美しさを確かめてみました。他のどんな高価のおもちゃよりも、これが一番美しくやさしいなと思いました。

1993年9月 東京都江東区木場の主婦



「木の砂場にもぐりこんで遊ぶ子どもたち」

1995年8月 旭川市青少年科学館

色合い、手触り...、長時間遊んでもあきることのない優しさとぬくもりを感じさせてくれる「木の砂場」子どもは全身で、その感触を楽しんでいます。不ぞろいの小さな木のボールが、一人ひとりの子どもの個性のように感じられます。

1995年8月 旭川市の主婦

再び、木の文化を子どもたちへ

自然が子どもの生活から遠くなりました。絵本の中には美しい森や木、野うさぎやシカなどの動物はいるけれど、遊びまわる森や木は子どもの生活から遠くなっています。

私の子どもころは、周りの野山一帯が四季折々に合わせた遊び場でしたが、今ではブランドもののウェアに身をつつみ、グレンデをかつこうよくする子どもはいても、野山を駆けめぐる姿をみかけることはほとんどありません。子どもたちの生活環境をみても同じことがいえます。幼稚園や保育所といった教育施設にも木製のものが少なくなっております。私の子どもころの学校には、先輩の名前が刻みこまれた年期の入ったガッチリした木製の机と椅子があり、そこに座ると不思議と気分がやわらいだものです。また、かつては人形以外のおもちゃはほとんどが木で作られていたものが、今では、ままごとセット、砂場セット、積み

木等もカラフルなプラスチックに変わってきています。

デパートにいても、木のおもちゃというと木馬、手押し車（カタカタ）、積み木とか、ごく限定されてしまい、しかも高価だという認識で気に入ったものを探すのは容易ではありません。これは日本ばかりでなく、デンマークとかドイツといった北欧諸国の事情もそう変わりありません。世の中が生活の合理化を追い求めているうちに、子どもたちの周りから木の文化が急速に姿を消していきました。消費化時代と大量生産で安いコストのものを作ろうとすると、どうしても木という素材は不適當なのかも知れません。

しかし、最近、木材が温もりと潤いをもたらす材料として、教育環境づくりに注目されるようになりました。木造校舎の建築、フィールドアスレチックなどの野外施設、また木製家具や木の玩具に対する関心は高まってきました。

私も今まで50会場以上で展示会を開催させていただいていますが、1週間で3万人近くの人達が見に来てくれた会場もあります。ラジコンやコンピューターの組みこまれた精巧でメカニクなおもちゃに遊びなれた子どもたちが、素朴で、しかも無動力な木のおもちゃに眼をキラキラ輝かせながら夢中になって遊んでいます。

「親の私の方が木のおもちゃに夢中.....ぜひ木のおもちゃで子育てしたいけれど高価で...」「本当に子どもに使わせたいと思うおもちゃが売ってなくて...」「いつも子どもたちを安心して遊ばせることができる木の遊園地の常設館があれば...」という言葉が聞かれます。こういった意味では、林産試験場、旭川産業高度化センターと、地元企業(旭川市)の共同開発によって生れた旭川ショッピング街(パワーズアルファ内)の木製遊具体験ゾーン「どきDo木ハウス」は新しい



「どきDo木ハウス」1995年11月 パワーズ（旭川市）

試みでしょう。

青いオホーツクの空の下に森林地帯が限りなく広がりをみせています。この地域にも新しい木の文化の芽がふき出しています。遠軽町の木工芸センター「木楽館」、臨森林型産業都市構想によるオホーツク「木」のプラザ（北見市，1996年春オープン）。屋内ドーム「木の遊園地」と、Toyシアター「木夢の島」の小劇場をメインとした「森の美術館」の着工（西興部村，1997年春オープン予定），世界の木の玩具を集めた「世界の木の玩具博物館」（生田原町，1997年秋オープン予定），木工芸センター「クラフトマン・ハウス」（留辺蘂町，1998年オープン予定）...と，木の文化を生かした新しいエリアができる予定です。全国的にみても各地に玩具館が続々とできています。それだけに



パズル 1995年8月 コロボックル（林産試験場）

木の文化の真価が問われる時代が来たと思います。本物とは...？を常に問いかけ続けながら、あせらず地道に作り続けていきたいと思います。 （完）